



71
A5
6037
4

五
十

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

56-4070



狗猶集卷第十四

雜上

おりてあきまゝ人よたごう
 橋板とまゝの石まじりて
 声もなきもよひ詠つるらん
 百姓の詠もたふさあう山は
 橋の板をとて川にまじりて
 大嵐長柄の里にあけまじりて
 思ふも紙の巻たてまじりて
 六浦をうりてあきまゝ

ア少キ

横山重

茶湯金てしも真然うや
川も然てくも楠入てま
山少くもくも水は流
海もあうも川上乃山も
軍もあうも川上乃山も
中少くもくも水は流
あつても人の長れも
山もあうも川上乃山も
青柳や蓮や鶴の糸も
貞徳

目も然てくも水は流
伯樂のうも川上乃山も
産もあうも川上乃山も
名も然てくも水は流
くも然てくも水は流
もくも然てくも水は流
山もあうも川上乃山も
目も然てくも水は流
もくも然てくも水は流
貞徳

切取く人海麂うま多れ
見ゆる虎の皮又豹の皮貞徳
此のりやうやまひひき
春に只たふらふすよたをこ
海と川とを度りて
鯨と又鯨尾の山一
あつていふれ中にうまれ
やう川やふの洞院川見海で
戒う人うううううう
海士のうまのまうかひん書や日

ふん斗のつら
あつていふれ中にうまれ
十六とととととととととと
中神の源氏の巻物
まひよあつていふれ
國のなれお換り文字とととと
田の海ととととととととと
書本の現る片古あ後日
上と下ととととととととと
勝るはあつていふれ時尻日

ぼたのこゝ尻のあしに海に
 びく引くともく来しつら
 貞徳
 中王をまゝくへおろし
 竹田乃子も火りくさす日
 くらぬつ年やうあま
 本卦ともくせ口たいきたれ日
 あらあまもくつ笛のそ
 法経乃能のあまそく
 主
 炎うくくあま乃存梅
 足物とく樹まもく
 山日

神と佛ともくあま
 額う目い程らうあ物まきや
 友
 あのみすもくも月残の果
 物金や木丸鞘乃山ひ
 日
 中押もく浪のうく
 日
 播乃小鳴酒あや餅
 日
 二家取くそく見も
 皆冠
 海まてうあれ一
 神中
 日
 天竺うくや林い
 まもく
 日
 穿人と目あ
 山く
 日
 見若
 日
 友

古川の多ふ家名をきん
二本の松乃丸太と柱一海女
早らねん山ふ見ゆれば
膏蓋紙あつ海女の紙巻て
却乃侍も今も一丈
くらねんあひさしとては
足らぬくへ腰引人たも
足りしそとつりあふ
早らねん流の海女多
番匠のまつるお井よあ
一正

世にハハカしくはま
山らの竹乃片くうた
乃ね毛もとの楳波の勢
猿樂よとては太鼓の面白
きまこひさしとては揚
と一のる丸太乃帳や
糸印とにある縄うあ
物舞や言ふとくは
うよかると船
鶴や大飼うとのう
日

中絶ありき故にそつをん
猿まひ一毎うぬるや大のそん

若狭あつする人乃可いそ
りししる力に業をそ春と読ん
義

とつこつく也須一の海聖人

鉄拐之谷もる道と浦舟よ日

兵具故舟よつそ八嶋海

海士人の礼や船突かす日

龍乃あまそ古家のうら

む火しそ無故か海を返日

勢ふはくせとたぬあ

あひのれあを味ふ古と集日

こまひあま力も読や海訓

所もふ報乃皮をねあひく日

伊豆の三嶋乃人れあまひ

吾棠の兄と後者と飾り日

道と清そ宿客をゆ

泊のそい白樂天よ日

一文字にやひそ日

菊つそ紙故あひよ買流そ
貞徳

二人静乃能のしんが
年より其基の助言をいふ日
牛の目志つるも子そを門
えくす十里どうらうられ時日
目くられ杖をはくうあま交
あら半の角やうそくゆは日
氣状うんまの鈴中の花
甲あまゆ従の安まされまて 主正
六の道もやうまにん
横笛の完りいれれ指とて 貞徳

あつてのわくも世をいふ
山椒の粉ひつる倍子いと青真の月
云ころくいまこわも神と
いははとこ一二三とていれ月
園伽乃水汲もうらされ
あつ風呂あつけの栢をのさで月
世ふ推られてあんせんあま
永樂のなげつひれと人あし月
常盤の子もそ病息災
おの本よけりて鶴の集成をて

ひささありし母色は若かり
の母は穢や此れを知らずらん 貞徳
乃ららるしも安んずる山
所為と茶室は茶をうけをれ 曰
伯耆の國は若かり人
珍敷星と見つく家草まきく 曰
野陣乃甲さまり此ふ多り 貞至
ふち乱れはふらら髪
髪ありしとてさうらふ列て 貞至
淺瀬なる川さる者 親至

口とカツの管見乃袖
学文者内契を親も成ゆらん 貞徳
ゆひ乃ゆふも是やさく此はん
ゆしふあふれ小袖着をく少 曰
皇も福もやあら終るらん
大く扇紙をさすゆへ 曰
多る此口をさすもささ
古今乃よりつてあしやく 曰
あつく只かさめゆら座敷を
そくくくくくは蠟燭の串 曰

名れ中にて水陸残つて居
武藏の國とて成る年交り日
解てとくよ敷も今も新
焼物のまうに奴は心も乃上日
乃りあうとて又さうは
乃らよ三条に結まひしきこ日
ひきくくせしと謝の海影
就焼乃りしふりく大は夢日
らりやと夢まきり飛書
物より目印の飛を夢ふり日

ふふふれ日とまう海影書
矣と及あらうとて金とて
松浦のりやま又は海
沖見まは鯨乃ある極ま日
うらたとまきり人の腰
長刀と又の山一り持く
徳舟まきりあ結乃山日
ひきし冠海の流と乃河
つと夜もまきりあ人の
あつ天八乃海ひひは
親ま

只物まね成ともや世も
其行よあふじのあはれあはれ
あや後乃人う遠のく
習師や又指つひの居るに
山され勢とさる毒を
諸國より印さうとれ親治細工
只成てくもあつた人
を印うた日腸指あまう様て日
と記つあひきいころ文神の
あふたて何と源氏成つたの海日

名所曰迄見あや人丸
系清とんつりりりりりり
山法及やあめ成つとれん
おさする内りりりりりりりりり
あまあふりりりりりりりりりりり
無さるりりりりりりりりりりりり
津國乃あつたさるる文詞
有言能お湯さうやおさる日
怪しくも肺のあつたさるる
麴者にのみ成りりりりりりりりり

山鳥丸尾也長分分別

あつた文化生乃為れ文致をて 長吉

さあくとやち多藝やの心術心

小言うひ玉見まよふ心く

集いんや衣を著る人音成機

たしあちあち文一秋換授 心整

審りし能依と志変れ浦風

浪あまそ網のりらぬ雲田鮎 休音

うそと事下と公みそり

口笛てし程と舞やととらん 一心

こぬまらる奥と素や春ぬらん

温元母氏おとあうらうと 貞徳

ゆゑ乃迫門と子や西陸舟

商人の備後舟と成買り印と 重頼

平治のそられやち世中

いしとれ餅むらる上戸旅日

難波の浦と風の用ん

まゝれ舟と鐘丸の札やちぬらん 長吉

折こしけり沙鉄の刃るる

判友結甲やぬえと改らん 貞徳

右近左と云ふは、
播磨と播磨と云ふは、
此より又云ふは、
生れ子乃人、
衣はあてふ、
津生あま、
しるも鬼乃瓦、
芥子に付て、
決るも知るも、

あらし道ゆ、
竹葉も、
病つ、
甲乃、
ま、
藤、
あけ、

祇園舎小海多治生あまひ
はまき母と楽うあまひ
浦乃湊ふたりうづつじ
難波津也平をれ未進納し日
とわ丸毒ふ目の光ふる字
お取のもろ人きうう集あまひ日
燕にさるるん男あまひ
碓乃二ツ結らうらあまひ日
うそく梅よううあまひ
と海をくせうつうらあまひ日

作らさういこふあまひ
あまひも貨狄う真結うの計日
兵庫れ海ふ五人うら
海賊ともこのあまひ浦うあまひ親ま
月をけう結あまひ
うあまひ江口の結うあまひ
あまひ貝れうあまひうら陽あ
餅屋の内うあまひのあまひ
あまひあまひあまひ人く
あまひあまひあまひの内日

四よりしにけりぬる石は教もあし

二家此第一う古い果は多積日

事外て妙多土師の山陰

岩然く経年いされ古く是

うこのの後の山方あうあ

海もよあまいて初母子共 成重

森う神乃津屋雨たれ

鯨つ伊勢れ海つ船んて 重頼

神も路のたもい赤飯

雨あれと秘制く毛糸みのあは日

あは海相とあひきやあ

とこの物たすたうすふ美見て 甚良

一様と事よせんさのうら

集方あはあうわと記物あは日

とかがあまんこくへん

たらう積いあは山の新も日

あやといんそあま埋火

あつらやを斗とあと流ん日

とれ中しうりい出さるる

とまきりあもあは数年あは下地意日

つとむ川てしう成ぬら
る能くぬ丸木の橋の下
火を焼きしうまぬ
松のりりれ申一匹切さ
う治へ人のあま
お茶春くひりりり
かひぬらうし
ゆら家乃柱をよ
救世えぬ公ひりりり
るのとも

あまぬ世ふ海ぬ
あしなる
お松ふあ
吉砂り
あ川一
あ人
系川と海松川
久あ川
蛤よ
戸

雨を乞ふに海東曆見なく日
暮らん箱に入らず事少
十三年あれとすい志ぬ福本同

狗獠集卷才十五

報下

物知乃るるる物知乃るる物
養性を次とあつたなりま
車と水はあまのり物の本
火のうらと見付て山くわら
是物より福財とくと義成るん
下ノ抄紙中にたのむる者
脈をや廣くあつてせつて
つらぬも其成あつてまける
貞徳

密も皆まの黒方に赤くも
南雲舟下たるこゝやの舟 甚友
来長より一丸の伊世物語
ふもとを愛ふ日向のち斗 曰
ひん即一人とつゝのまを
衣文もつて機拍首ふ引お紙一宗二
秘苑もつて夫と夫とつて
契成りつてつてつてつてつて
此つゝ余もつ目のちおつて
けり無よこも終落れぬ前とつて 曰

何うあつてつてつてつてつて 曰
夕日と海乃底もつてつて
西意つてつてつてつてつて
思ふつてつてつてつてつて
何とつてつてつてつてつて 甚友
勿れつてつてつてつてつて
氏もつてつてつてつてつて 一正
けつてつてつてつてつて
正つてつてつてつてつて 曰
清もつてつてつてつてつて

相坂乃園として初と奥に
くまの肉より描うあまなる日

まじふあはる位あまの
大犬乃ろろと小女を引けて

月の末にう大小いあは
拘縋ふ口ワ尻山一あま

人乃きあはるは甚玉の物
短尺よびひいてあはる

判友れあまのあはる
見よあはるあまのあはる

只或まひつてあま

ふひもあはるあまのあはる

あまのあはるあまのあはる

座頭の坊之屋あまのあはる

あまのあはるあまのあはる

あまのあはるあまのあはる

あまのあはるあまのあはる

あまのあはるあまのあはる

あまのあはるあまのあはる

あまのあはるあまのあはる

あまのあはる

かくあゝめけふあらんといふ
はらふとしてをるかもしも
ぶらんといふはらひはらひ
婦人よこれあはれうきあはれ
あはれくはらひはらひの山
月々交材よとてさうと
虹を川にさふまつくはら神
病の立治よとてさうと
春をさしてはらひはらひ
はらひはらひはらひはらひ

少神よあはれ川あはれあ
方よとてはらひはらひはらひ
圓の戸あはれはらひはらひ
蟬丸のつらあはれはらひ
月々交材よとてさうと
はらひはらひはらひはらひ
はらひはらひはらひはらひ
はらひはらひはらひはらひ
はらひはらひはらひはらひ
はらひはらひはらひはらひ
はらひはらひはらひはらひ

五紙へてか山乃奥
鉄炮乃うすておひさす猿の夢 良徳
山遊乃あいのまぬゝ系
新中よふれ志あうてて 貞徳
ゆゑちる紙乃中いゝあぬ
けん並札の上紙あて風よ 曰
ゆゑきてきてあゝとてあまの
針のら見まよ見乃まゝの 皇一
真物てあゝすゝあんとあよ 曰
うしあはれうとあよしりてあ

とて神々世様やにあれ 由巳
扇乃あひ紙あてあ物あ
あゝと屏風とてて 福海 徳え
あ戒とああゝとああ 惜也
二三人して筆紙あんとあ 成至
大物の上ああうひのうあ
あ紙あれあ。まあやこあ 友友
あひくくあああああ
らゝ人あ世界あ圖とあああん 意あ
白丁ああああああああ

弓もあつて上もあつて
走りもあつてさうもあつて
帆もあつて舟もあつて
死ねるもあつてぬきもあつて
下もあつて上もあつて
上もあつて下もあつて
物もあつて物もあつて
教のうらみもあつて
典義のまじりもあつて
見もあつて見もあつて

徳
徳
徳
徳
徳
徳
徳
徳
徳
徳

はかりし徳もあつて
人を送るもあつて
徳もあつて徳もあつて
生もあつて死もあつて
はかりし徳もあつて
徳もあつて徳もあつて
徳もあつて徳もあつて
徳もあつて徳もあつて
徳もあつて徳もあつて
徳もあつて徳もあつて

徳
徳
徳
徳
徳
徳
徳
徳
徳
徳

山姥うらふふを太鼓少日
 口やくのう世は多かれ
 もろくは人妻の稀なり
 手形
 ぬいぬるうたのぬもろ
 山馬よつては後つちあり
 貞徳
 山姥やこいさのやのむ屋敷
 山姥よまてあいにちおはだん
 及職
 山方よきては山姥よ山乃神
 勝負やひらふ海よとじ流ん
 おもくもあふ契いうらむ

子とのあふもては系清 欠座
 山姥をいせぬらう
 汁よ入くたふちありん
 日
 せんあくと屏風の知まら日
 瀧波の海流するも山屋舟
 義
 ちんきふくちの園のけりぬ
 甲うひのてきんて上座乃上
 日
 ちんきれきんてくち車
 織屋屋の機よ教ふれ系とく
 日
 ちんきれきんてくち

暮の建入酒の門より果
門よ小書成とあるく
くまんにある一か守り織物や
見ん少く用付の
教と又さすの海鳥の
うらひひよちあれ袖口
下と上と二人教とつ
は夜と其を祈りて物
まて今誓ひに成らん
あつひくふら

貞徳

判のらりつとくおもて
終末つらあつたそ
たんがの書を成書と
とらひよかんる沖の
成故より依海より
親の海鳥とて人
大江山つきの
赤川とあ家
ま働の形見の
二人居て

貞徳

重衡を二門乃座ぶつと申
ゆらひたる格のまん中
あはれもするもの色は餅とて
やうなれておりの建も薩の
鐘乃ゆつて入るゝら残
な紙後の世ふ跡と実盤
うらまは物まればきや刀鑑治
目ともいぬと池乃釣度
人參とよと平家いあゆまじ
かゝるやも世ふ林果し世ふか

重衡
主彰
主彰
主彰
主彰
主彰
主彰
主彰
主彰
主彰

涙とてふふとては
毫末よりを建とて寒中
も衣の海城とてら
面とてをぬみあはれ
うらひとて屏風の正徳紙
うらみとて又とて
救世とて妙とて
當代とて皆とて
挨拶とて心座頭とて
足達とて

主彰
主彰
主彰
主彰
主彰
主彰
主彰
主彰
主彰
主彰

氣丹（一） 紫（一） 紫（一） 紫（一） 紫（一）
新（一） 新（一） 新（一） 新（一）
無（一） 無（一） 無（一） 無（一）
山（一） 山（一） 山（一） 山（一）
海（一） 海（一） 海（一） 海（一）
羽（一） 羽（一） 羽（一） 羽（一）
重（一） 重（一） 重（一） 重（一）
あ（一） あ（一） あ（一） あ（一）
う（一） う（一） う（一） う（一）

あ（一） あ（一） あ（一） あ（一）
次（一） 次（一） 次（一） 次（一）
摺（一） 摺（一） 摺（一） 摺（一）
宋（一） 宋（一） 宋（一） 宋（一）
学（一） 学（一） 学（一） 学（一）
ぬ（一） ぬ（一） ぬ（一） ぬ（一）
所（一） 所（一） 所（一） 所（一）
日（一） 日（一） 日（一） 日（一）

上きつらんあもまふらん白智
六十年にわたるあつ流の著やを
葛友

星月新あやふあふまふ
盗人の鎌倉山に盡す
浅きやと法を絶く
米とともあふあふせん
上あふせんあふせん
まふ日あふせんあふせん
あふせんあふせんあふせん
あふせんあふせんあふせん
貞徳

あふせんあふせんあふせん
羅生門あふせんあふせん
人乃あふせんあふせん
亭主あふせんあふせん
あふせんあふせんあふせん
あふせんあふせんあふせん
あふせんあふせんあふせん
あふせんあふせんあふせん
あふせんあふせんあふせん
あふせんあふせんあふせん

楊貴妃乃公之御世記也
華清宮中も去り少くも
言り入るる也先には
暁のりて新討つるも
神ももあやめ日約の
くともあやめ日約の
東本刈神の繩帯かた
もあやめ日約の
頃もあやめ日約の
日

中本刈神の繩帯かた
もあやめ日約の
頃もあやめ日約の
日

親王

三鴻乃里り屏風をうらむ月
 播戸乃若う湯の山よ入
 子ハ其とてうまぬれら軍 貞徳
 出田あつちも出るあつ約
 何名能もあつて種を松本
 物あつち少坂本とてうそれ
 若志をとらとあつて武蔵坊
 宗登とあつて之とあつて
 兵庫にうら海西國乃少子 親重
 月々又あつてあつてあつて

吉野うらうとてうらあつてあつて
 甲の九秘成せんあつて
 とてあつて下つてあつてあつて
 津海ハ鴻乃あつてあつて
 八条能あつてあつてあつて
 座あつてあつてあつてあつて
 室山や又十徳の能あつてあつて
 所あつてあつてあつてあつて
 山けあつてあつてあつてあつて
 人の病成あつてあつてあつて

百姓ハテ後乃田はく少
 切多クはあふ鯉也うはん
 川よまされも鱒うあまてり
 ちきまはまたたくれもかち捨て
 おにおあふまふ少あふん
 神乃まふ湯そはかまの釣津
 月より鳥乃あくは古ま
 ああ少の徳野糸は冷く
 振舞よじつらくきる鯉
 梳も折あふも鱒口あふ

少くもまふあふあふあふ
 棚子野鳥の羽筆とあふ
 竹のあふ孔雀あふあふ
 目もあふあふあふあふ
 月もあふあふあふあふ
 鶴あふあふあふあふ
 まあふあふあふあふ
 ああああああああああ
 難波ああああああああ

ひろくもたぐひももまじり
秘の川あまにわすの女房
秘りして海なりくもら子
ふくもつしし枕をーや
え所ーさ此翼は多あや
うもれすすら前もつーん
あまもつしよる女房の法
徒解て成てく山をさし
まも用らも海もさ
多代鶴うららるる

長刀のまこららてういあ
竹乃のちりすたらく
早道山ま寛の水乃ま
あまもつし山田らり田
淡きもあま年女
けんら子へはく海
ふくも代くく女家の風
唐も日本も思入の
ゆとつらま成海
まのまらるる

繩と引く人きつる釋迦堂
たたくと先鱗口と折あし
浮きあやせまゝくわくは鏡お
とさやれあさきらく交まをた
しあ正門より印はは玉章
さゆゆていさなれもさうさ
あひあよひし子るなあめ
りし方まきあはるはひ
あややこはくや戸たひ
月もくや鳩の書あめりお

音とれあきらくもたこも
お政の矢を出きてるあゆ
う治の命教さくたたら真
まもああまのあはれまき
をんふもあまらるるあゆ
やあまらまらるるあゆ
腹立てるあまらるるあゆ
あまらるるあまらるるあゆ
あまらるるあまらるるあゆ
あまらるるあまらるるあゆ
あまらるるあまらるるあゆ

繩子結末落もたらく
物筈乃あひさし先汗かき
手とたてまつるやとらふ
登りたさうひやせと計
ハハの上にくは鳳凰
この編つてて貴族の
年あはゆる頭中をいふ
杖つくるも只平々
日くくくくあまのまに
いふくくくあまのまに

糸あはひて懸懸
蟬丸あはれ舞つて
弓あはれ月山くく
糸あはれ麻の山く
ひくく中つてひ
きくひくくあまの
山あはれ長あはれ
糸あはれあまの
糸あはれあまの

富士草の伊予の鶴の如く
静かならむとたゞの事とて
鶴と鶴のうらみはそと

七十七句右の律に律の
二百約の角按出也

謡詠諧

程の舞乃乱の如く
とて舞のうらみはそと

物なき乳や園子結見ふん
大らんにもよ及して讀へ文
あつて只の只の佛乃ては
つりやうの心神の如くは
まはるまのひくく勢の如く
如きは越の柳とては
二人静ふる心とては
可くも茶との心くも
風よ山やけは月弓や
あしあから姿うらみはそと

落しききしとつふ楊貴妃
あはれや白樂天の詩乃公
月よ庭よや守り給神
啼くまの鹿と夜くやう社
刀をてぬ代もうあま
教書厚の定家の紙花計
助端の梅乃端の土紙と紙
雄波津乃馬をく物部やん
も智紙も金札りてん
浮舟の素れ及具乃はう

らとと山すす山亭の林
アソク紙やふしとひきて
あふんれあふん女はう
あやうも奥小籠あやん
江口乃浪りり大綱
志松の枝や老乃海端ん
赤相蕪乃つや海端ん
俊寛の公はくも永日
えひられ矢の孫みく
ますと今世のま

み感ふやーぬくあきさーさ
月松斗乃響にひりーの
浪のうけ敷の流乃青杉山
しりおろ様子見るやびら
右近うあつ流とよそへあまん
西ういーち海をきくも森松
まへう海とのと波交り舞のま
入相おちうまんとらたもゆし
小普乃ひひる現うらゆゆり
しら月松とて胸のあつ連

方おーむらうらふいまはら
林の物大とくうすせんは
流分ましぬは世と影も
あつささるるぬらつ心花さ

望三十一句右に或人独吟
百句の内極也

狗獺集卷才十七

一句ニ付句百五十句付一ノ三付句十句
日脇才三付

貞徳

白き物さう黒くやあはれ
天り此玉の岩戸と引きて
とらけいふ事成程乃水あはれ
美ふ文時の祢もさやあはれ
松原乃うらとさやあはれ
よらうれおひやうらさあはれ
古業ハ越後魁の毛てあはれ

とらふれいもあやしく火の道
もやとくくして入る丸茶も
火まきておせよ少茶や紅らん
形もまじりておのり具あひ
重代乃源氏れんて紙の製
小刀とて紙をまきと材はそ
こまよもゆも海塩やあつらん
夕ふんのむも少と少の敷茶火よ
うましくれぬい箱や式之蓋
多品乃すい茶漬の結とす

実盛れんひんやふらんひん
もら豆腐あつらん色もあは
富士乃山玉碇やれ紙も書て
百草と入るもやうすもあは
夜衣立居よ蠅の少んを
銀河下よまこれぬやうらん
水乗れよよ本らんけりあは
一極ももゆもぬ我のやけ茶
見らん紙もこまの星は肉
鱈汁のう紙もまは昆布汁

白き物より黒く染みぬ
瓶より水は澄みしりりし鍋を煮
餅を煮てあゆみつるをいすは
綿やうし後まきすよき
根に根よりまき土にうす果
やうんふふたうすまき
麻より皆鉄炮のまふま
まき身す食はよきまき
ふれまふりやあつらん
うすま湯の粉も光のまき

わ毛よりふ毛よりいすまき
虫か子にけりあけさる乱髪
くすひうすあれよあま皮
煉少ふ川流の鮎よりい果
有馬山湯より楊枝よりい
ゆよりいすまきよりいす
うすまきよりいすまき
生身賊よりいすまき
常事より地産のふすまき
帯よりいすまきのいすまき

かとうら上は玉をくく貝
しらもも縹子の一まお磨
ひりまふ縹乃ららとあはし
あふ全結るもひふ茶中ら果
まぬよまらるるられらひりく
まの結はぬてくくにあふは
ひりあふあふする塩はまらそ
けららら座敷の柱らあ付く
まらあらと継尾れ磨はあ磨
凡る肉よ素子紙よひら付く

無頼を法て強らぬらあま
さる水よ素子の塩てまら
ひらあらとああらとあはし
眉やまらとああらとあはし
筋腦と磨書とああらとあはし
登れらとあらとあはし
右二十五句

白文物と黒く成る物
杖之月とあはしとあはしとあはし

當るころなりと申して、千蔵
 らふころの團扇を遊や清く
 古より美人頭上にひけりし
 まゝ、糸織南雲丹も美しき
 唐のちりしやきぬき茶籠
 推草れうろ好くも初より
 方れ風篋乃虫と化し戸ん
 團乃糸、清風の正紋れ幕も
 きらきらしく秋火も石灯圍
 清く紙もひら右書真盤も

索麴やうろく藝しくもな
 作らそやとある風煙まく道
 法下れう海乃人の長衣
 塩とや泣く糸のうろし
 乃妙そ板やのふれうろ
 かんへとひまもくは乃も
 焼亡もやけりもも一柱
 柴とや年うろそ力に
 老る秋の月も皆も蝕も
 光の遊や清くあひて今

まら只以道して凡道は海客と
砂糖よあめりも枝乃唐つて
象よおる普賢の堂は火に沸て
本世よひくまんを供らきひく
大魚本成道のかりふつて
石とられ又字もたつて
夕とらばは清浄香桶入ぬを
粉とやひもろのつり樽と
けいりよふて
うすのちとからん乃布に
て

色れ子成十つとと火や
目と見つる
灯心の
無人の
其の
吾乃
銀屏
その
す

驚れ仇つもてあはれやいふて
象牙とらひひこちあまきすのあは
野まの鳥井れあやまきくたん
天神の一糸乃髪よ冠まきて
ひらあめらあめしつちあつあめ
まをわいひてえあまをいじ
いひく交もえに雲の点とて
散米や僧乃衣ふはくじと無
くら所の花紙りつてあ着
右み平句

一句ニ付句十句

五とらひんそて又あまを
梅五や花乃花あつあ新ふ
ひもあつひふ源氏の物語
新く心輪や枯ふあまあ
神愛いよれあまの物あ
何とて仙壇場ふこちあ
まの物乃かこちあま
長くぬ及母の鹿乃伐角
世君と何ふたえん水の淡

不思代もいぢれ道進も経も
けりよのいぢれ母中成へては

同一句三付句十句

しよとくもあふにんては
系りもや山路も秋分て 貞徳
治すも上より能く治すも
妹らとあふもいぢれも
あぬ中姑いぢれ家も
四目もいぢれ海もいぢれ
結末もいぢれ法の進めも

山中ていぢれもいぢれ
腎屋もいぢれ男もいぢれ
誹尺もいぢれ腹のいぢれ
いぢれのいぢれいぢれ

腸才三三付句

春

大いけ物もいぢれいぢれ
正月もいぢれいぢれ

曰

と釣波もいぢれ天もいぢれ

大少の口は竹自在金

曰

春乃日の大あひひて秋の
砕醒るまじ茶のまじり

曰

も新まつひとけし秋の
比ゆるる家ふ乃爆竹

曰

まきく井井柳のあひり
比くやさく乃名もさき

曰

舞の後和方紙上舞乃蝶
花乃まじり坪のうら
酒初屋の麴乃りやかと

文

木乃せよかの木れ夜くら
可継乃こり一庭の竹の子

梅遙院殿へ宗鑑法師始
何儀し時宗長法師候
てまじりふ梅遙院殿

浄南庵

宗鑑が姿状見違はす
乃まんときれと友の海
蛇よおんまきそつらうまん

右眼の宗長才の宗鑑

林

稲妻と光源氏
月おたま久勢乃

曰

お祭とる英名

聖徳太子推古
山のふち大田

曰

つらや松林の
夕日志の山

曰

あまの栗石月の
来も長くぬき
あの子れ

冬

天乃ららし十月うらむじま
岫のせまき山結うらむじ

曰 東山門迄あり

廣正池乃るもなすありま
帝りし目白れと海も松え

曰

市門迄西へくまへ雪佛
見くをせまぬお存の影

曰

屍もらとつてそらふ感言

備後とふらふとふらふ

寺町二条二町上

大炊道場

お故用板

四ノ五十二

